

他者への好意が共感性羞恥に与える影響

— 罪悪感とゆるし傾向性に着目して —

1721205 橋本望々香

Key words: 共感性羞恥, 特性罪悪感, ゆるし傾向性

目的

共感性羞恥とは、他者が恥ずかしいことをしている姿を観察した際に、“気詰まり”や“ばつが悪い”という対人困惑感を経験する現象である (Miller, 1987)。これまでの研究では、他者が恥辱の反応を示してなくても共感性羞恥と定義してきた。しかし、他者への共感がない際に抱く感情を共感性羞恥と呼ぶのは自然だろうか?これまで共感性羞恥として扱われてきた感情の中には、他者に対するネガティブ感情が混同していた可能性がある。そこで、本研究では特性罪悪感とゆるし傾向性に着目することで両者の差異を検討した。また、共感性羞恥に影響を与える要因として、他者への好意と羞恥感情の表示に着目し、共感性羞恥の生起メカニズムについても検討を加えた。

方法

手続き 調査は、2020年10月中旬にGoogleフォームを用いたWeb調査法によって行った。調査参加者は大分大学生121名(男性78名,女性43名),平均年齢19.81歳($SD=1.52$)であった。

質問項目 調査参加者は、性別・年齢などの個人属性及び、特性罪悪感尺度(大西, 2008)、ゆるし傾向尺度(石川・濱口, 2007)の他者へのゆるし傾向因子、シナリオ場面における共感性羞恥、ネガティブ感情について回答した。シナリオは、関係条件(仲良し・苦手)と羞恥条件(あり・なし)を被験者間で操作した4種類を作成した。

結果

尺度の分析 特性罪悪感尺度について、先行研究に従って α 係数を求めた(利得過剰の罪悪感 $\alpha=.87$, 屈折的甘えによる罪悪感 $\alpha=.78$, 精神的罪悪感 $\alpha=.91$, 関係維持のための罪悪感 $\alpha=.92$)。ゆるし傾向尺度、共感性羞恥、ネガティブ感情についても α 係数を求めたところ($\alpha=.79$, $\alpha=.82$, $\alpha=.90$)、十分な信頼性を得られたため、平均値で尺度得点を算出した。

罪悪感と共感性羞恥の関係 共感性羞恥を目的変数、性別、年齢、罪悪感及びシナリオと罪悪感の交

互作用を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、有意な標準化偏回帰係数が得られなかった($R^2=.13$; 利得過剰の罪悪感: $\beta=-.06, n. s.$, 屈折的甘えによる罪悪感: $\beta=.12, n. s.$, 精神的罪悪感: $\beta=.09, n. s.$, 関係維持のための罪悪感: $\beta=.09, n. s.$)。

ゆるし傾向性とネガティブ感情の関係 ネガティブ感情を目的変数、性別、年齢、ゆるし傾向性及びシナリオとゆるし傾向性の交互作用を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、羞恥の交互作用が認められた($R^2=.17, \beta=.22, p<.05$)。下位検定の結果をFigure 1に示す。

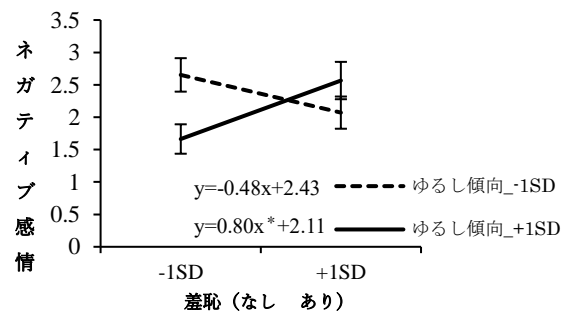


Figure 1 ゆるし傾向性と羞恥の交互作用がネガティブ感情に与える影響

好意及び羞恥感情の表示と共感性羞恥の関係 共感性羞恥を従属変数、関係、羞恥を独立変数とした2要因分散分析を行ったところ、両者共に主効果は認められなかった(関係: $F(1,117)=3.91, \eta^2=.03, n. s.$, 羞恥: $F(1,117)=0.20, \eta^2=.00, n. s.$)。

考察

本研究では、羞恥感情の表示がない場合のみ、ゆるし傾向性がネガティブ感情を低下させることが明らかになったが、その他の研究目的を達成することは出来なかった。その理由として、日本と海外の文化差とシナリオの内容及び操作が不適切であったことが挙げられる。今後は、日本と海外における恥の認知の違いを詳細に検討する必要があると考える。シナリオに関しては、想定する場面を変更し、好意の操作を明確にする等、十分検討の余地があるだろう。

引用文献

Miller, R. S. (1987). Empathic embarrassment: Situational and personal determinations of reactions to the another, *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, (6), 1061-1069.